

	分科会名	略称	分科会会員の参加可否	分科会活動紹介HP	目的・活用概要	対象者	内容	活動方法	2022-2023年度主な成果物
1	SPI推進課題分科会	SmallSteps分科会 SSs分科会	可能	—	SmallSteps分科会は、改善アイディア(蓄積された個別のSmallSteps事例)を「発信可能なレベル」で文書化する活動を行っており、プロセス改善人材育成トレーニングをゲーミフィケーション理論を活用して楽しく行うための初級者向けSPI人間ゲームの開発と試行を行っています。昨年度は、それらの試行結果を分析して追加の試行を行うと共に効果の検証を進めて論文にまとめ、EuroSPI2024で発表しました。	(1)活動目的「改善の現場で困っている人を支援したい」に賛同いただける方 (2)現場で使用可能な改善のための知識について、初心者も含めて再利用性を高めるための取組みに興味を持ち、活動に協力していただける方 (3)興味をお持ちの方のご参加を歓迎します。	本年度は、以下に取り組む予定です。 SPI人生ゲームの追加分析・改良・(継続的な)実施 - 会員企業内の追加開催 - 新規のデータに基づく分析と、内容の改良 - 初級者向け教育における位置づけの明確化とSPIアソシエイト資格との連動の検討 具体的には、初心者向け教育に止まらず、SPI推進者の実務を支援するツールとして、発展を見据えて資格推進Tとの連携も継続検索していかたい SmallStepsカードの改良 - JASPIC全体合宿でのワークショップを受けて、内容をV2.0に改訂する - PM要素を盛り込むことで、新バージョンのゲーム開催につなげる - SmallStepsコンテンツの見直し、PMBOKを含めた拡充などにもとりくみ、試行を継続 - BOKを使ったGamification(トレーニング)作成支援サービスの提供 - SPI Associate教育コースとの連携	・月1回程度のペースでWeb会合を開催して、予定した活動を進める ・成果物のまとめ、および集中ディスカッションのための合宿を実施する(WebまたはReal)	・改善課題解決ワークショップ資料一式 ・EuroSPI2024論文-【事例研究:SPIマニフェストのゲームベース学習】
2	SPI事例研究分科会	WOK(知識網)分科会	可能	—	カンファレンスの発表論文やJASPIC内の企業事例などを学習し、自分たちの組織で活用できる知識を抽出することで、SPI事例をより深く理解することを主な目的とする。 併せて、類似の知識を共有し、抽出した知識をSPI-WOK(SPI知識網)に追加することで、知識の共有・資本化を推進する。	(1)SPI事例を幅広く学習して知識を組織に持ち帰りたい、また、会合参加者から参考となる知識を吸収したい方 (2)吸収した知識を再利用可能な形で整理して、蓄積・活用したい方 (3)蓄積した知識を体系化して関係性を整理し、より再利用しやすい形で公開する仕組みを整備する活動に興味のある方	【これまでの活動テーマ】 プロセス改善において必要とされる知識の構造や関係性、コアとなる部分やその広がりを調査研究することでプロセス改善や知識に関する理解を深め、あわせて、必要な知識の収集と活用のしくみを構築する活動として、2019年度以前は、SPI Japan カンファレンスの発表概要のテンプレート化、発表事例から知識を抽出して文書化するテンプレートとしての「亘理帳」の開発を行ってきました。 2020年度以降は、定期的に勉強会を開催し、事例の勉強(輪読・議論)や事例発表者との議論を分科会合同や公開の場で実施し、「亘理帳」に記載された知識の蓄積を行うと共に、蓄積された知識をWiki形式で公開するための仕組み構築に向けた検討を実施してきました。 【今年度の活動計画】 2025年度は、以下の活動を実施する予定です。 1.「亘理帳」形式による再利用可能な知識の網羅的・持続的な蓄積と整理 -知識管理への生成AIの活用方法を研究し、知識創造の効率化を進める。 -SJ25など公開の場での事例研究を継続し、JASPICに集まる改善知識を「亘理帳」として蓄積していく。 2.「亘理帳」として蓄積された知識同士の関係性や特徴などに着目した分類/グルーピングから、WOK(知識網)/ BOK(知識体系)として整理していくために必要な検討を行。ボトムアップ/トップダウンの両方からアプローチして、WOK/BOKの姿を明らかにしていきたい。 2.蓄積した知識のWikiサービスや生成AIを用いた公開/活用 -「亘理帳」に記載された知識をWikiサービスやGitHubなどを用いて登録/蓄積/活用していく。 -同様の情報を生成AIによるインターフェースを通じて、知識を提供・活用する方法を研究・構築する。 -上記に蓄積された知識群を、どのようにWOK/BOKとして可視化すれば、再利用や新たな知識の創出に役立つかを議論して、Wikiサービス/Chatサービスとしての仕組みの改善につなげていく。	・月1回程度のペースで会合を開催して、各自の検討結果等を持ち寄りディスカッションを行う。 ・成果物のまとめ、および集中ディスカッションのための合宿を企画して実施する(したい)。	亘理帳 2024年度作成分(19件2種)
3	ソフトウェアプロセスデータ実践分科会	SPC分科会	可能	—	・ソフトウェア開発に関する、プロセスデータの収集・分析・活用に関する技術交流を行います。 ・ソフトウェアプロセスデータの分析に必要な統計の基礎を学ぶとともに、データ収集や活用に関する -ディスカッションを行い、実践的で効果のある分析・活用の実現方法を考えます。 ・ソフトウェアプロセスデータの経験共有をおすすめします。(パターン言語など)	(1)ソフトウェアプロセスデータの収集、分析、活用に興味のあるかた(初心者歓迎) (2)プロセス改善の定量化、効果の測定・実証のやり方などにお悩みの方 (3)ソフトウェアプロセスデータの経験共有に興味のある方	■これまでの活動成果 -統計技術に関する書籍の輪読および事例紹介 -データ活用(AI技術含む)に関する外部講演 ■今年度の取り組み(予定) -データ分析技術に関する定期輪読会(オーブン参加可能、Zoom使用) -フリーディスカッション:データ収集・分析・活用および「価値」に関する事例・文献紹介、課題共有や悩み相談と話し合い、情報共有化方法(パターン言語など)の検討	月1回程度の定期的会合。希望参加者内の調整により決めます。 当面はリモート開催(Zoom)とします。 状況が許せば、メンバ所属組織の協力を得た実会合や、合宿形式での集中勉強会を開催します。	-
4	SPI現場ノウハウ交換分科会	ノウハウ分科会	可能	—	レームワークのプラクティスを読み解いたり、各社の取り組みを共有したりすることにより、プロセス改善活動の理解を深める。さらに、プロセス改善全般の実践的活用事例等を研究する。	現場でのSPI活動に日夜苦労されている方々	フレームワーク及び研究方法はメンバーで議論し、選択する。 <研究方法> ①対象フレームワークのプラクティスの実践的な解釈を議論し、具体的に実践方法を形式化する。 ②実践的解釈に基づき、プロセス改善の実践方法について議論し、成果物にまとめる。	・月に1回程度の会合 ・会場はオンライン、またはメンバー持ちまわりのオフライン開催を原則とする	
5	コア・コンピテント・チーム研究会	CCT分科会	可能	—	現代のソフトウェア開発で強く求められる、マインドセット、コミュニケーション、チームワークといった、「非技術的スキル」、「ソフトスキル」を様々な観点で捉え、議論しながら理解を深めます。 「心理的安全」「共感と同情」「コミュニティ心理」「キャリア自律」など、現代のソフトウェア技術者の方の抱える悩みや解決法を議論し、「やりがい」を追求します。		働き方に関連する参考書籍を輪読(ABD)して経験や感想を話し合い、問題を掘り下げます。 また、関連する技術・手法や論文等を持ち寄り、チームと個人の関係、集団やネットワークとチームの違いなどの理解を深めます。  参考書籍 (継続予定) -世界一のエンジニアの思考法/牛尾剛 -心理的安全性とアジャイル/プロムストロム -ユニコーン企業のひみつ/ラスマセン (新規予定) -SI企業の進む道/宮脇慶彦  関連技術・手法など -人間を大切にするプロセス・組織として、People-CMM -心理・感情のとして、カウンセリング、コミュニケーション心理学、感情心理学 -働き方、やりがいの学習として、キャリア自律、コンピテンシマネジメント	月に1回程度の会合(主にWeb会議)およびメーリングリストでの議論。 参加の障壁とならないよう、会合は最長1時間とし、できるだけ短時間かつコンパクトな場にする。 環境が整えば合宿での議論を行う。	CCT標準集
6	プロダクトライン分科会	SPL分科会	可能	<a href="http://www.jaspic.org/activities/sig_308-spl/">http://www.jaspic.org/activities/sig_308-spl/</a>	プロダクトライン分科会では、その名の通りシステムおよびソフトウェアのプロダクトライン(SPL)に興味を持つ研究員が集まり、2005年から活動を続けています。年度の初めに決めた活動テーマに沿って、各自が本業の傍ら調査検討した結果を持ち寄り、月1回程度の集中討論を交わすことで、新たな知見を獲得し、プロダクトラインへの理解を深めています。	(1)プロダクトライン型の開発を成功させたい方 (2)プロダクトライン型の開発の導入を考えている方 (3)複数の製品ラインアップを効率良く開発したいと考えている方 (4)ソフトウェア資産やプロセス資産を有効活用したいと考えている方 (5)プロダクトライン開発の考え方や技術を開発以外に適用したいと考えている方  興味をお持ちの方のご参加を歓迎します。	本年度は、オンライン会合やオフライン合宿など分科会メンバの経験や知見を活かした会合の場での議論等を通じ、新たな理解を得て、今まであまり触れられていなかった観点からプロダクトライン開発の様々な姿と問題点について検討を進め、その結果をSPLノウハウとして成果物にまとめていきたいと思います。 特に、「プロダクトライン思考によるDX」(モーデリング、分析)は、3~4年議論をしてきましたが、まだまだ議論したい内容が多く残っており、引き続き掘り下げていきたいテーマです。 具体的には、以下のテーマを候補と考えています。 - フィーチャーモデルのさらなる展開 - まずは、異業種への展開例の深堀 - その他、別の有望な展開候補があれば など、参加者の方のご興味合わせて追加したいと思います。	1) - 月1回程度のペースで会合を開催して、各自の検討結果等を持ち寄りディスカッションする 2) - 成果物のまとめ、および集中ディスカッションのための合宿を計画する	フィーチャーモデルとモデル適用事例 ～フィーチャーモデルの地平を広げる～

7	人材育成分科会	人材育成分科会	可能	<a href="http://www.iaspic.org/activities/sig/310-hrd/">http://www.iaspic.org/activities/sig/310-hrd/</a>	人材育成分科会は、ソフトウェアプロセス改善のための人材育成を各種の課題、技法、教育体系、知識体系等の観点で検討を加え、得られた知見をもとに各社の教育プロセス改善に役立つ成果物作成を目指して活動しています	(1)ソフトウェアプロセス改善(SPI)活動の人材育成や組織能力開発に日夜苦労されている方 (2)SPIの教育体系・人材育成技法について知見を広めたい方 (3)SPI推進者として知見を高めたい方	2016-2017年 2017-2018年 2018-2020年 査と適用検討 2020-2024年 ショップの開発	アジャイル型人材育成調査・研究／アジャイル分科会連携 ゲーミフィケーション活用ワークショップ開発と実施(SSs分科会と協同活動) ゲーミフィケーション活用ワークショップのブラッシュアップとTeal組織とOKRの調 エンパシーについての調査と、エンパシーを向上させるソシオドラマ活用ワーク	・月1回のベースで定例会合を開催して、各自の検討結果等を持ち寄りディスカッションする	ソシオドラマで体感するSPI人材育成ワークショップ一式 (2024年度版)
8	関西分科会	KS分科会	可能	—	目的:「ソフトウェアプロセス改善の対話を関西で実施したい。」という目的で設立した分科会です。 社内で解決できない理想と現実のギャップを解決するために、メンバーでアイデアを出し合いながら知識やスキルを向上することを目的としています。 活動概要:社内外でおこるソフトウェアに関する課題、悩み、理想と現実を各自もより、その解決の糸口を見出すための分析や情報共有を行います。	(1)社内で解決できないソフト開発に関する課題をお持ちの方。 (2)日本のソフトウェア開発をよりよくしていくこう日々努力している方。	社内外でおこるソフトウェアに関する課題、悩み、理想と現実を各自も、深堀する。 【今年度の予定テーマ】 (新規) ・「人を大事にする」プロセス、組織、風土の研究 (People-CMM) ・大規模プロジェクトや組織運営へのアジャイルの応用の研究・事例共有 (SAFe, LeSS他) ・UXと人間の関係性の研究(認知、行動、心理とのつながりなど) ・心理・感情に関する学習(カウンセリング、コミュニティ心理学、感情心理学)  (継続) ・経営とSPIとの関係を調べる ・SPIの近未来を予測してみる(海外の現状/社会情勢/SPIの現状 ・VUCA時代のSPI内外の全体像をマッピングしてみる	年10回程度の会合、ほぼオンライン開催ですが、状況によりリアル開催します。	—	
9	要件定義プロセス分科会	RD分科会	可能	—	生成AIを活用したシステム開発の最新動向を学び、要件定義プロセスへの適用方法を探ることを目的します。AIの可能性を理解し、業務効率化や品質向上につながる具体的な活用方法を議論します。	システム開発に携わるエンジニア、プロジェクトマネージャー、ITコンサルタント、要件定義を担当するビジネスアナリストなど、生成AIを活用した新しいアプローチに关心のある方。	近年、生成AIはシステム開発の各フェーズに革新をもたらしています。特に、要件定義のプロセスにおいては、アイデアの発想支援、要件の整理、仕様の自動生成など、多くの可能性を秘めています。本勉強会では、「上流から下流まで生成AIが変革するシステム開発」をテーマにABD(アクティブ・ブック・ダイアローグ)を実施し、知識を深めた上で、生成AIを要件定義に活用する具体的な手法について議論します。  【活動内容】 ◎ABD(アクティブ・ブック・ダイアローグ) 「上流から下流まで生成AIが変革するシステム開発」に関する文献を参加者で分担して読み、要点を共有しながら学びを深めます。  ◎対話とディスカッション  ABDの内容を踏まえ、生成AIを要件定義プロセスに適用する方法について議論します。実際の事例やユースケースをもとに、効果的な導入方法を模索します。	「上流から下流まで生成AIが変革するシステム開発」のABD 生成AIを要件定義プロセスに持ち込む方法(上記ABDを踏まえた対話)	—	
10	プロセス改善戦略分科会	戦略分科会、SPIS、PuKaSe	可能	—	・SPI Manifestoや分科会策定の戦略フレームワークを用い、メンバーが所属する組織・事業を主な対象とした「戦略の策定・評価・改良」の議論を通じて、改善活動の進め方を改善する。 ・(軍事戦略、ビジネス戦略など)プロセス改善以外の他分野も含め、戦略についての研究を行う。	(1)プロセス改善活動の進め方に悩んでいる方。 (2)プロセス改善活動の戦略的な計画立案や、現在の戦略の診断・見直しに関する議論・アドバイスを行なう。 (3)プロセス改善戦略のフレームワーク研究に興味のある方も歓迎	・戦略フレームワークを用いて、分科会メンバーの組織を対象とした「戦略の策定・評価・改良」を行い、改善活動の進め方にに関する議論・アドバイスを行なう。 ・ISO30314やDX戦略を含めた、一般的な戦略についての研究を行う。 ・生成AIを用いた戦略議論。	・月に1回程度のWeb会議 ・年に1回の合宿(今年度はリアル合宿も検討) ・(できれば)学会発表	—	
11	IDEALモデル実践研究分科会	IDEAL分科会	可能	—	キヤッチフレーズ:あい(AI)でやる分科会 IDEALモデルをベースとしたSPI活動に、生成AI(ChatGPTなど)を取り入れる研究	(1)最近のプロセス改善動向(経営層の視点・アジャイル開発など)を踏まえ、適切なプロセス改善サイクルを模索している方 (2)プロセス改善活動で生成AIを活用することに興味がある方	・2024年度に検討した生成AIを活用したプロセス改善フレームワークをブラッシュアップしつつ、現場に活用できるカタチを訴求し、実際に現場で適用事例を収集	月一回を目安に、Web会議で議論予定	・生成AIを活用したプロセス改善フレームワーク ・SJ23事例 生成AI適用資料 ・プロンプトエンジニアリング学習のための参考資料	
12	SPI Manager分科会	SPI Manager分科会	—	—	休会中					
13	オフショア分科会	オフショア分科会	可能	—	・オフショアノウハウ集 体系化 オフショアにおける様々なノウハウをカテゴリ(プロセス・文化・制度など)毎に分けて体系化した成果物作成 ・IRC(Intercultural Readiness Check)を用いたオフショア国との異文化コミュニケーションの研究 ・オフショア状況共有 ・各国の一般的なオフショア状況(オフショア開発白書など)、特定国深掘り議論(例:インド)	(1)オフショア発注/推進している、またはオフショア発注を検討している方 (2)オフショア開発対象国の国民性や適性などに興味がある方 (3)オフショア開発に関する知見・経験などを共有していただける方	オフショアノウハウ集 体系化 短時間(各回 1H)で定期的(毎月)な検討会を実施して、成果物として仕上げる  IRCに対して理解・試行・取込というフェーズで取り組む IRCの理解:ノウハウ集の約30件について、8つの側面のどれに当てはまるかを議論しながらIRCの理解を深める Culture MapとHofstedeも適宜参照 IRCの試行:ノウハウ集と類似の問題が起きている組織を特定し、キーパーソンにIRCを受診 組織の選定にはオープン分科会も活用 改善提案を組織で実行し、効果を共有 IRCの取込:2の試行結果を分析し、ノウハウ集に反映  オフショア状況共有 毎年5月頃に発行される「オフショア開発白書」を取り寄せ、分科会内で考察	基本的には、短時間(1時間)で1回以上/月でリモート開催 IRCなど大きなテーマ時は、集合(リモートハイブリッド)開催	・海外活用事例共有 ・Intercultural Readiness Check 試行結果 ・オフショアノウハウ体系構築用ファイル(仕掛け中)	

14	アジャイル分科会	アジャイル分科会	可能	—	<p>アジャイル開発は近年ますます適用領域を拡大しています。WEBシステム開発のみならず、企業の基幹システム開発や組込みソフトウェア開発でもアジャイル開発の適用が進んでいます。適用が進んでいる背景には、以下のニーズがあり、アジャイル開発の狙いと合致しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・変化の激しい市場環境に対応するために事業部門から素早い仮説検証と要求実現を期待されている</li> <li>・AIなどに代表される急速な技術革新を武器として積極的にビジネスに取り込まなければならない</li> <li>・上記のような不確実性(VUCA)に対応するためにはリスクの高いものの試行や短いサイクルでのフィードバックが必要</li> </ul> <p>そして、アジャイル開発の根底には「改善」の考え方があり、JASIPCのテーマである「ソフトウェアプロセス改善(SPI)」と深く関連しています。よって、JASIPC研究員がアジャイル開発の知識を得て、企業内で積極的にアジャイル開発を推進することは自然な流れだと考えます。アジャイル分科会では、その活動を後押しします。また、これからアジャイル開発を学んで一部でも実践してみたい、ご自身の業務にアジャイル開発の考え方を取り入れたいという方々も歓迎します。</p>	<p>(1)企業でプロセス改善を推進している人 (2)アジャイル開発に興味を持っている人 (3)アジャイル開発に携わっている人</p> <p>1Q[12-02月]:メンバ募集＆各社の状況確認＆テーマ・バックログ作成 2Q[03-05月]:トワイライトフォーラム実施(SJ論文応募促進企画) 3Q[06-08月]:SPI Japan ワークショップへの立候補と企画立案 4Q[09-11月]:SPI Japan 2025 ワークショップ実施</p> <p>その他、月次ミーティングを設定して以下を実施します ・分科会メンバがお互いの知見を共有します ・分科会メンバが抱える課題を皆で議論します ・アジャイル開発とは何かを知りたい方々への勉強会を実施します ・外部の有識者を招いて講演＆議論します</p>	<p>月次ミーティングを設定して議論します Slack上に非同期の意見交換の場を設けます 年1回の合宿を企画します</p>
15	プロセス改善への機械学習応用分科会	MLP分科会	可能	—	<p>AI(機械学習)技術が急速に進展しつつあり、種々の分野への応用が模索され関心を集めている。そこで、機械学習技術のソフトウェアプロセス改善への応用に取り組む分科会活動を展開する。</p>	<p>・ChatGPTなど機械学習技術のソフトウェア開発・プロセス改善応用に関心のある方(初心者歓迎)</p> <p>月1回程度会合(主にZoom)を開き、以下のような活動を実施する:</p> <p>(1)基本的な文献読説(小野哲「ソフトウェア開発にChatGPTは使えるのか?」技術評論社)各章に担当者を割り当て説明する。前年度からの継続で、今年度は第5章より開始する。この文献が終了したあとは別の文献を分科会メンバで話し合い選択する予定。</p> <p>(2)ChatGPTの使用経験・情報共有 (例)仕事や趣味でChatGPTを使ってみたという体験談 最近こんな技術がでたという情報共有 他分科会でのChatGPT使用経験の共有</p>	<p>月1回程度の定期的会合。希望参加者内の調整により決めます。 当面はリモート開催(Zoom)とします。 状況が許せば、メンバ所属組織の協力を得た実会合や、合宿形式での集中勉強会を開催します。</p>
16	セキュリティ分科会	SEC分科会	可能	—	<p>昨今の製品/サービスへのセキュリティ要求の高まりを受け、自動車や医療を始めとしてネットワークに繋がる電子機器全般の開発・運用・保守プロセスへの適用を狙った法規/標準が多数制定され、対象物を開発/提供する企業は、それらへの対応としてのプロセス改善を加速させています。この状況を受け、まず、JASIPC会員企業内でのニーズに応えるべく、前記プロセス改善実践者の育成支援を目的としてセキュリティ勉強会を立ち上げ、知識獲得を支援すると共に研究員のニーズを広く収集してきました。</p> <p>現在EUで立法のための最終投票が行われているCRA(Cyber Resilience Act)は、広くネットワークに接続される電子機器全般を対象に猶予期間2~3年で製品へのセキュリティ機能の組み込みや販売後までの脆弱性対応義務などを課すための認証制度を含む内容となっており、日本を含む世界中の関連企業にとって今後極めて影響の大きなものとなります。そこで、まずCRAの詳細内容を調査検討して必要なプロセス改善内容を特定すると共に、今後のセキュリティ法規/標準の動向を見据えて、あるべきプロセス改善の姿とそれに必要な知識やスキルの獲得方法を研究する場として、セキュリティ分科会を立ち上げました。</p>	<p>(1)自社製品/サービスのセキュリティ法規/標準対応や品質向上の一環で、セキュアな開発・運用・保守プロセスの整備や実践および展開に携わっている方 (2)セキュアな開発・運用・保守プロセスの整備や実践および展開に必要な知識やスキルを身につけたい方 (3)世の中のセキュリティ動向やサイバー攻撃/防御技術および関連する法規/標準の進化などセキュリティ全般の話題を知りたい方 その他のセキュリティ分科会の活動に興味をお持ちの全ての方のご参加を歓迎します。</p> <p>EUのCRA(Cyber Resilience Act)の内容調査と理解、対応方法の分析や検討など -2024/12/11発効の法規内容(最終ドラフトと内容的には差分なし)に対して -内容理解と期待レベルの推定 -上記に関連してEUCCやENISA資料などの追加調査と分析 -対応方法の議論(活動内容レベル) -追加検討が必要な内容の特定と分析/検討 -その他、参加者個別の関心事に関する追加の議論や成果物作成など</p> <p>セキュアなプロセスの整備や対策技法などのテクニカルな内容の議論 当分科会参加者のCRA以外の関心事に対する議論や調査/分析など -EUのAIA(Artificial Intelligence Act)とCRAの関連 -PSIRTの構築や運営に関する悩み事 -SBOMの作成/更新や脆弱性の監視/対応に関する悩み事 -ハードウェアに関するサイバー攻撃手法の勉強 -その他、参加者の関心事について</p> <p>セキュリティ勉強会との連携活動 -勉強会へのセキュリティ関連ネタや資料の提供 -勉強会に参加してのお悩み相談での議論など -その他、勉強会からの要望への対応など</p>	<p>・月1回または隔月1回程度のベースでWeb会合を開催して、予定した活動を進める ・成果物のまとめ、および集中ディスカッションのための合宿を実施する(WebまたはReal) ・セキュリティ勉強会(月1回または隔月1回程度のベースでのWeb会合)と開催日を調整して負荷の集中を避ける</p> <p>・「欧州サイバーレジリエンス法(CRA)」の概要説明資料</p>
17	322-UX	User Experience 分科会	可能	—	<p>社会の複雑化や流動化が高まることに伴い、システムやソフトウェアも信頼性だけでなく、利用時の品質の重要性が高まっています。法改正によりウェブアクセシビリティの向上が求められるなど、「利用者」を考える必要性が高まる一方です。</p> <p>これらは、アジャイルやDX、サービス化とも関係する領域ですが、見栄えや美しさといった狭義の「デザイン」で語られやすく、Experience(体験・経験)として学ぶ場は多くありません。この悩みを共有し解決を助ける場を作るとともに、ソフトウェア業界を牽引するJASIPCとして文化・風土づくりに挑戦していきたいと考えています。</p>	<p>(1)「UX」に関する業務(開発、支援、管理など)を担当している方。 (2)次のキーワードに関係する悩み・課題をお持ちの方。 UXリサーチ、UX評価、アクセシビリティ、ユーザビリティ、ユーザインターフェース、人間中心設計、デザイン、体験、利用時の品質 (3)その他「UX」に魅力を感じた方、興味を抱いた方。</p> <p>月1回程度の定期的会合。希望参加者内の調整により決めます。 当面はリモート開催(Zoom)とします。 状況が許せば、メンバ所属組織の協力を得た実会合や、合宿形式での集中勉強会を開催します。</p>	<p>月1回程度の定期的会合。希望参加者内の調整により決めます。 当面はリモート開催(Zoom)とします。 状況が許せば、メンバ所属組織の協力を得た実会合や、合宿形式での集中勉強会を開催します。</p>